敦煌千佛洞の營造に就きて

自分は曾て佛教美術第四册に於て、敦煌千佛洞に關する一小篇を掲げ、中に其の創始を以て、現存史料の上から晉の永和九年（353 A. D.）に置くべきであることを論じ、なほ武周の聖曆元年に建てられた大周李君修功德記の文の西域水道記に見にて居るものに據つて、秦の建元二年（366 A. D.）に樂僔、其の後法良禪師、更に其の後刺史建平公東陽王等の建造の功を紹介したのであつた。たゞ其の際には此等の人々については、此の碑文の記事以外に知る所が無かつたので、「これまでの記録がありながら、此等の人々の時代、從つてかゝる營造時代を明かに知り得ないのは遺憾である」と述べて置いた。然るに本年五月下旬、東京中村不折氏所藏敦煌出土の遺書を調査して居る間に、偶然此の中の東陽王に關すると思はれる史料を發見し、更に之を魏書に照して略ぼ其の時代を窺知するを得たと信ずるから、前に小篇を公けにした關係上、更ためて其の所說を補ふことにする。

中村氏所藏敦煌出土經卷、律藏初分卷第十四に奥書があつて、次の如く見にて居る。

大代普泰二年歲次壬子三月乙丑朔廿五日己丑弟子使持節散騎常侍都督嶺西諸軍事車騎大將軍開府儀同三司瓜州刺史東陽王元榮惟、天地妖荒、王路否塞、君臣失禮、於滋多載、天子中興、是得遣息叔和、早得廻還、敬造無